

英語の CALL 学習について

水野 康一（大学教育基盤センター国際教育部長）

全学をあげてのグローバル人材育成の取り組みの一環として、国際教育部では英語教育のカリキュラムの充実を図ろうとしている。第3期中期目標においては、全学の TOEIC 平均点の5%向上を掲げているが、目標達成のためには、質と量の両面において教育改善を行わなければならないだろう。

英語教育の質の改善については、大学教育基盤（開発）センターの教員を中心に長年にわたって、取り組みがなされてきた。少人数教育、統一シラバス、習熟度別クラス編成、授業外の e-learning 課題など、学士課程で身につけるべき英語スキルレベルの達成のためにこれまでに様々な改革を繰り返してきている。ここ3カ年ほどは TOEIC の全学平均も上昇傾向にあり（2010年～2012年の416点に対して2013年～2015年は430点）、質の改善も少しずつではあるが効果を上げつつある。

一方、このような質の向上への取り組みに比べて、量の側面についてはやや後回しにされてきたところがある。むしろ質の向上と引き換えに、学生の英語学習量（時間）は減少しているおそれがある。例えば、今から20年ほど前に少人数クラスの導入した際、クラス数が大幅に増えたが、教員の配置数（コマ数）の増加がなかったため、やむなく一年時において教室での授業時間が週2コマから週1コマに減少となった。授業外の学習課題を制度化し、統一シラバスで強制することにより、学生の英語学習時間を維持しようとしているが、授業外学習は教員の学習管理が困難である。外国語科目の2単位は週2コマ相当の授業と予習復習ということを考慮すると、授業外学習課題の改善が単位の実質化、すなわち、いかに学生の英語学習時間を増やしていくかが、現在本学の英語教育が抱えている課題である。

このような問題意識から、授業外学習課題の見直しが、現在大学教育基盤センターの英語教育部門で検討されている。新たな e-learning システムが平成29年度より一部学部で試行される予定である。この取り組みについては、来年度の本紀要で報告したい。

現在、授業外学習課題の改善に関して、もう一つ試行的に実施しているのが、CALL 学習である。CALL とは、Computer-Assisted Language Learning、すなわちコンピュータを用いて語学学習を行う活動のことで、広義では現在の英語授業外学習課題の e-learning も CALL に含まれる。ただし、現在試験的に実施している CALL 学習は、授業時間外に学内のコンピュータ教室に学生を集めて、英語の自習教材を各自のペースで学習させるというものである。以下に本年度の試行的実践の概要を述べる。

平成28年度の CALL 学習は法学部・経済学部の新入生の中から参加希望者を募った。

全学部生を対象としなかったのは、コンピュータールームの定員というハード面の問題があったためである。入学前に希望聴取を行い、146名の希望者の中から抽選で100名を選び、CALL学習実施する4クラスを編成した。入学後にCALL学習について説明会を実施し、再度希望をとったところ、51名が参加することになった。なお、4つのCALLクラスにおいては、CALL学習と従来のe-learning（リングポルタ）のいずれかを選択できるようにし、CALLに参加しなかった49名はリングポルタを学習した。CALLとリングポルタは学習内容・方法が異なるが、授業外学習（e-learning）として成績評価においては同じ取り扱いをした。

CALL学習は、授業期間中の月曜日と木曜日の昼休み（あるいは金曜日の2校時を前半・後半に分けて）に45分ずつ、図書館3階のコンピュータールームBにおいて行った。学習教材としては、本学に導入されている英語自習教材ALC NetAcademy2のスーパースタンダードコースを利用した。学習者アンケートの結果、CALL学習に対する参加者の評価は概して高く（図1参照）、前期末まで学習を継続した者は51名中45名であった。そのうち半数以上が後期もCALL学習を継続していることから、半年間毎週2回の自主学習が、学習習慣形成に一定の効果を上げていることが確認できた。実際の英語能力の向上については、12月実施予定のTOEIC試験の成績の伸びなどで確認したいと考えている。

今回試行しているCALL学習は、学生に授業外学習を促すという点で一定の効果を確認できた。教員の援助がなくても、コンピュータ上で学習が遂行できるので、TAに出席管理や確認テストの採点・集計を手伝ってもらえれば、安いコストで大人数の学生に英語学習を行わせることが可能になる。一方で学習者にとっての負担は大きいので、学習意欲の維持については課題が残る。今後は試行の規模を拡大していきつつ、モチベーションの高くない学生でも効果が上がるような学習システムを考えていかねばならないと考えている。

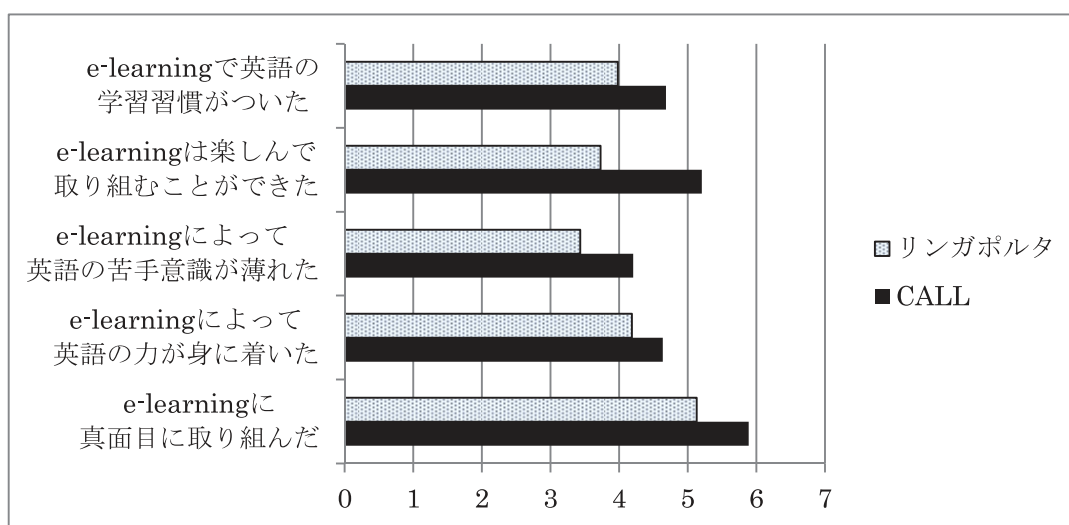


図1 e-learningについての学生の評価（第1学期終了時点）
（全くそう思わない（1）から強くそう思う（7）までの7段階評価の平均値）